

青少年アンビシャス運動地域連携事業第1年目を振り返って

青少年アンビシャス運動推進本部運動推進委員会委員長

横山 正幸

福岡県の青少年アンビシャス運動が目指しているのは、志をもったたくましい青少年の育成である。したがって、その実現のために私達がすべきことは、本来ならすでに一定の水準にある子ども達の体力や気力や知力をさらに高め、夢がもてるような環境をつくってやることである。しかし、現実には多くの子ども達がそれ以前の状況にある。

例えば、「何もしたくないと思うことがある」という、無気力な子が中学生で「よくある」(39.8%)、「時々ある」(37.0%)を合わせ76.8%いる(福岡県, 2002)。また、「自分は何をやってもダメな人間だという感じがある」という自信のない子が中学2年生で「よくある」(16.2%)、「ときどきある」(44.0%)を合わせ60.2%いる(福岡県, 2001)。これでは、志をもったたくましい青少年になるのは難しい。

この背景には、幼い時からの生活リズムの乱れ、集団的な遊び体験や読書体験の欠損、過剰なテレビ視聴などといった子どもの生活体験のあり方が深く関わっている。

そこで、小郡市の小郡小学校区(小郡地区)と宗像市の南郷小学校区(南郷地区)では、まず子ども達の自主性(意欲)や自尊感情(自信)を高めることを目標に、この1年間学校、家庭、地域の三者が連携し、子どもの生活の乱れを調整し、欠けている体験を補完し、過剰な体験は抑制するように努めた。

その結果、①両地区とも精神衛生(心の健康状態)のよくない子の割合が以前より低くなっていること、②自主性診断検査の得点は、南郷地区では当初より全体に高く、大きな変化は見られなかったが、当初全体的に低い水準にあった小郡地区ではかなり上がっていること、③自尊感情の得点は、小郡地区では目立った変化はないが、南郷地区では高い子の割合が増えていること、が明らかとなった。これらの事実は、学校、家庭、地域が連携しての総合的な取り組みは、子どもの状態を望ましい方向へ変容させるうえで一定の有効性があることを示唆していると考えられる。

なお、就寝時刻やテレビ視聴など生活リズムについては、両地区ともまだ改善の兆しが見られない。今後、子ども達の精神衛生がさらに望ましい状態となり、自主性、自尊感情が高まるためには、この点に関して関係者の一層の努力が期待される場所である。